

が二度とないよう、シベリアに果てた人々のご冥福を祈りつつペンをおく。

満州からシベリアの八年

愛媛県 宇都宮 政 壽

大正九年十月八日、東宇和郡笠置村の農家に長男として生まれる。

県立宇和農業学校（現宇和高等学校）の修学旅行が旧朝鮮、満州の十五日間であった。この旅行で見聞した新生満州国の、限らない希望と夢を抱かせる広大な新天地に魅せられた私達は、「卒業したら満州だ」と少なからぬ影響を受けたのである。

帰国後間もなく肋膜炎と腹膜炎に罹病、療養生活二年半、この間には医師が父に「会わせる人があれば呼ぶように」と危篤の時があったと後で聞かされた。全快後、石城村役場に一年間勤める。

昭和十五年七月、徴兵検査を受け、丙種に合格。

十六年、私立中野高等無線電信学校在学中の九月、満州国治安部警務司の採用試験に合格。学校は繰り上げ卒業を認め、面接の係官から新京（現在の長春）までの赴任旅費を支給され、早速に荷物をまとめて帰郷。驚き不安がる両親に見送られ、十月一日、新京の警察学校に入る。

同月二十四日、通化省公署警務庁警備部無電室勤務を命ぜられ着任。ここでは受信送信の実地訓練と、暗号の教育と訓練であった。

十七年八月一日付で濛江県公署警務科無電室に転勤。朝陽鎮という駅からは軍か県公署のトラックに便乗するのが唯一の交通手段、電灯がひかれておらずランプの生活。星も出ない夜など、道ですれ違った人もわからぬ真の闇になる街であり、大勢の共匪が帰順帰農している密林に囲まれた山岳地帯の物騒な街でもあった。

三カ月でランプの生活から解放され、十一月一日付で鴨緑江河畔の輯安県公署警務科無電室に転勤。国境の故か憲兵隊、鉄道警護隊、県警、税関の職員も剣を

腰にしており、軍刀をぶら下げた人の多かつた街。私達若い者は、日本人経営の料亭で、きつぷの良い妓や鉄火であねご肌の芸妓達と意気投合、夜を徹して痛飲するなど、青春の血をたぎらせた忘れ得ぬ人々や思い出尽きない街であった。

十九年七月末に依願退職するまで、無線通信士兼暗号員として勤務。八月一日付で北安省北安市、北満車両株式会社に入社。同社に勤務中の二十年五月十六日、召集令状を受領。翌十七日午後一時、松風一五二〇七部隊北孫呉六二八部隊に入隊した。

通信隊には軍馬が多く、入隊間もなく既当番に就いた朝、癖のある馬にそれとも知らず近づいた時、急に尻を向けて来たので慌てて下がるが間に合わず、恥骨を蹴られて昏倒。大きなこぶができるが骨に異常がなく、これが少し上で内臓、下なら擧丸が裂けて死んでいたと、まさに幸運に尽きる出来事であった。

六月末、人事係の准尉が「予備士官学校を受験せよ」と。今さら学校でもないと同辞したところ、七月一日付で斬込挺進隊に転属を命じられた。この隊は昼

夜転倒演習を実施中で、昼と夜とが逆。兵は木箱に砂を詰めた疑似爆薬を抱え、兵が引つ張って走り回る大八車を敵戦車に見立てて飛び込む演習ばかり。生きては絶対に帰れないと覚悟をした。

過酷な夜間演習続きで病人が次々に出たためか、七月末に身体検査がある。軍医に「結核性の肋膜炎と腹膜炎で三年近く入院した」と申告したのが効を奏してか、原隊に帰される。ホッとしたのもつかの間、翌八月二日には新京に新設部隊の要員として転属命令が出る。五日、満州三七三二部隊諏訪隊に着任。小隊長が本県三津浜町出身の玉井見習士官であった。この時、携行した三八式騎兵銃や帯剣などを「歩兵部隊に回せ」と取り上げられて丸腰となる。

十五日早朝、「ソ軍迎撃に第一線に進出する」と手榴弾二発が支給された。これで戦えと言うのか、天下に聞こえた関東軍も落ちぶれたものである。わが隊は幸運にも銃火の洗礼を受けることなく、寛城子で終戦を迎え、武装解除後、新京医科大学校舎に收容される。收容直後、ソ連兵に囲まれ、銃を突き付けられて

腕時計や万年筆を強奪され、敗者の悲哀をつくづくと覚える。九月十一日、新京出発。この時の編成で指揮班に編入され、将校の荷物運びと炊事係。

二十八日、黒河からブラゴエに上陸。ここの野営のとき、工兵隊から借りていた荷物運び用の鉄棒に夕食の飯盒を吊るして火にかけ、身体が弱っていた井上二等兵に火の番をさせて、私は全員の水筒を持って河まで水を汲みに行き、帰營してビツクリ、鉄棒が爆発して、井上の胸に鉄片が突き刺さっており、飯盒は形も無いほどに、将校達は頭から灰や汁を浴びて呆然としていた。私は当然にソ軍本部に連行され取り調べを受けた。「黒河の棧橋近くの路上で拾った」で押し通して釈放されたが、一つ間違えば銃殺もの、冷や汗タラタラであった。工兵隊に問い合わせたところ「戦車の無限軌道に食い込ませて爆破、走行不能にする兵器だ」という。知らぬこととはいえ、大勢の犠牲者を出しかねないところであった。病院に送った井上二等兵の生死は不明のままに出発せざるを得ず、誠に無念。

十月四日、ウランウデの收容所に入り、製材工場班

に編入。非能率的な上場で、監督はがなるばかりで成果はさっぱり。ノルマ未達が続き、食事は質量ともに最悪になる。一年くらいは我慢したが限界に来て、重営倉覚悟でスト決行、座り込む。この時、運の悪い兵は警戒兵に銃で突かれ痛い日に遭う。カンカンに怒る監督に「一片のパンと少量の塩汁」を見せ、「これが昼食、これで働けるか、ノルマの査定を考えろ」と交渉、監督もこの食事には驚いて、善処を約束したのでスト中止、怪我人なしで終わる。

このことが原因か、数日後、監督が交代する。新監督は凍傷で鼻の欠けた、やせてギスギスした五十過ぎの女性で、意地が悪く、一日中「速く、速く」とうるさいので、鬼婆とあだ名を付けて呼び溜飲を下げていたが、「日本では悪魔のような老女」を言うと教えた馬鹿な兵がいたらしく、それ以降、手痛いシツペ返して、多くの兵が長い問苦勞をさせられた。

一年半が過ぎた頃、原木が入って貨車下ろしの夜間作業中（時間構わず入って来るたび夜間でも製材班は引く張り出された）、ソ軍軍曹が迎えに来た。何事

かと帰ったところ、本部の地下室に放り込まれ、若い中尉から「暗号」について尋問を受ける。通訳が、ハルビンで日本人と結婚していたという四十歳くらいの美しい女性であったが、日本語はタドタドしい片言程度、応答がkami合わず、いら立った中尉が、どなり、机を叩いておどしたり、時には拳銃で殴られもしたが、何度も死にそこなった身、クソ度胸を決めて、以降「忘れた」「知らん」以外は黙秘で通したら、匙を投げてか、十時間ほどで解放されたが、この時の恐怖と「戦犯」という不気味な文字が頭の隅にこびり付いて、舞鶴に上陸するまで離れることがなかった。

噂ではあったが「憲兵、特高警察官らを三人密告すれば日本に帰す」の甘言に釣られて密告する者がいるらしかった。

入ソ以来一年有半、大小さまざまな事件を体験し見聞したが、中でも脱走事件は、深夜扉を蹴破るような音で飛び起きる。自動小銃を手にした四人の兵が班内を点検、上野上等兵がいな。「捜せ」と銃で小突かれながら収容所内を朝まで捜すが見つからず。夕方、

作業から帰って聞いたところでは、他の班の上等兵と二人で脱走、貨物列車の連結機に乗っているのを発見されたという。銃殺にはならず営倉に入ったと。三日日に帰って来て「東でなく、西に向かって走っている列車に乗っていたので銃殺にならなかつた」などと気楽な話をしている。金もなく、言葉も通じない国で、どんな成算があつたのか、あきれた人であつた。

この頃、私は二度痛い目に遭う。爪と肉の間に刺さった木片を抜いたままにしていたら化膿、軍医に診せる。「抜かないとダメだ」と、メスで爪の周囲をサツと切つて、アツと思う間に生爪を剥ぎ取られる。もう一度は、奥歯が十日以上もうずき、歯茎が変に思えるので軍医に診てもらう。「歯茎が化膿している。放っておけば骨膜炎になる」とメスで切開し膿を取つて「明晩七時に来い」と。翌晩、麻酔なしで抜歯、衛生上等兵が腕の脈をとりながら「大丈夫です、大丈夫です」と言うのが聞こえる。頭が真っ白になりかけた時に終わる。脱脂綿を丸めたのを渡され、「これで押さえておれ、しばらくで血が止まる」。誠に荒っぽい

治療であった。收容所では怪我と病気は大敵、薬がなく、粗末な食事、下手をすると死に直結する。

ちょうどこの頃、アクチーブと称する連中がやって来て、收容所の民主化をやるという。私達少数の二等兵は、收容所に入ってから関東軍の編成で、階級もそのままの不合理的に屈辱と苦痛と忍耐を強いられていたので、彼等に協力して階級呼称を撤廃しようとひそかに根回しをしていた。ある夜、体中に刺青をしている青木上等兵に裏庭に呼び出され、「階級呼称撤廃の首謀者が貴様ということで、班長達が私刑にかけると息巻いている。俺が抑えているが、長くは抑えきれん。弱っている身体にやられたら死ぬぞ。自分のことだけ考えろ」と注意してくれた。これもまた密告によるものようであった。

アクチーブの連中は、收容所の民主化どころか、「スターリン大元帥に感謝しよう」「ノルマを二〇〇％達成しよう」「天皇島に敵前上陸の理論武装をしよう」など、ソ連迎合の話ばかり。「收容所の民主化はどうした」などとヤジっていたら、「收容所の民主化を阻

む反動分子」のレットルを張られ、二十二年九月三十日、ユウレユラク收容所に転属を命じられる。転属前日、医務室で女医や看護婦が「毛虱の駆除をする」「一匹もおらん」「規則だ」で、脇の毛と陰毛をきれいサッパリ剃り落とされる。こんな国でもこのような規則があるとは考えられず、彼女達の面白半分の思いつきだろうが、面食らう。

こちらの收容所では屠殺工場、漬物工場、道路工事、鉄道工事、農場など日替わりの労働をしながら、各地からの転属兵を待つて、十月二十五日、キノロスカ五二五——收容所（クズバス炭鉱地帯）に転属。

この收容所に入った直後、階級呼称が撤廃され、私は何がどう間違ったか班長に指名される。班員二十人中十七人までが上等兵以上の兵と下士官、彼等が何かにつけて陰湿ないじめをやるのと、慣れぬ坑内の作業に監督が総ての指示と責任を班長に押しつけてくるので、肉体的疲労に精神的疲労が加わり、苦しい日々が続いた。

坑内の労働は、石炭を貨車への積み込みや坑木の運

搬が主な作業。八時間労働、三交替制、一カ月ごとに作業時間を交代。交代する日は十六時間、坑内で休みなしの労働である。中でも最も厳しい交代は午後四時入坑のときだ。午後三時前收容所を出発するので夕食抜き、翌日の午前八時まで飲まず食わずの重労働、坑内から上がって器具返納、シャワーを浴びて整列、十時過ぎに收容所に帰り朝食後、欲も得もなく泥のように眠りこけたものである。

こんな中でも嬉しいことがある。ダイナマイトを包んでいる紙が発破の後で手に入り、紙に苦勞をしなくなったことと、真っ黒になって坑内から上がるので、毎日シャワーが浴びられ、下着の洗濯もできるので、一カ月もしないうちに虱の悩みから解放されたことである。

ある日の終業時間が近づいた頃、監督が回って来て空の貨車を見つ、「横坑に溜まっている石炭を落とせ」と怒りまくるので、危険で嫌な作業だが私がやらざるを得ず、横坑にのぼり、この辺までなら大丈夫だろうとスコップを突き立てると同時に足元が崩れ、大

量の石炭に巻き込まれて堅坑に転落し胸まで埋まる。これは生き埋めになると、大声で必死に連呼。異常を感じた監督がのぼって来て顔をのぞかせたので「早く石炭をおろせ」とどなるが、落ちて来る石炭に「早くおろせ、早く」と気が気ではなかった。交替時間間近で発破がかからず、一度に大量の石炭が落ちてこず命拾いのできたのである。監督が「大きな石炭が出て来た」と馬鹿笑いをしたのには、「冗談じゃない、死ぬ思いをしていたのに、この野郎」とぶっ飛ばして、スカッとしたかった。

二十三年六月中頃、疲労の限界を超えたのか、作業から帰る途中、人事不省になって倒れ、医務室に担ぎ込まれる。軍医が「肝臓が参っている」と女医に説明して休養の許しが出る。翌日、班内の掃除などしていたら医務室に呼ばれ、女医が「作業に出ろ」と。軍医から「作業本部からの命令らしい、説得は不可能」などの説明がある。翌日から作業に出る。十日ほどしてまた倒れたが、女医は休ませてくれなかった。

七月六日、命令受領に班長集合で大隊本部に行く。

ソ軍将校がいて、帰国者名の発表であった。わが班では私一人が該当し、班に帰って伝達。素直に喜んでくれる者、「班長一人でよく帰れるな」「女医にどんなゴマすった」などと嫌味を言う奴。だが遠慮することもないので「一足先に帰るが、皆も早く帰れるように祈っている」と最後の挨拶。翌七日、貨物列車に乗り、出発する。初めて停車した頃、私は上段の隅で横になりウトウトしていたが、車両ごとに班長を指名し、命令受領に集合の連絡があったらしい。誰が音頭をとったのか「宇都宮さん起きてください、班長に指名されました」と。断ったところで承知するはずがないので了承、本部に行く。「赤旗の歌を暗記せよ、ナホトカでは言動に注意せよ、スターリンと輸送指揮官への感謝文の検討」などの指示がある。

二十一日、ナホトカ着。異様な雰囲気にはささか驚く。なんでも日本共産党の徳田書記長が暴漢に襲われて重傷とか、それに抗議するデモ行進や演説会が開かれていたのである。我々も早速デモ行進に参加させられるが、激しい駆け足のジグザク行進には、半病人の

多い我が班員は音をあげる。

八月十一日、乗船命令が出る。復員船永徳丸に乗船するタラップで、頭の隅にあった「戦犯」の恐怖が急に頭いっぱいになり、宇都宮、戻れ」の命令が急りはしないかと気もそぞろになる。船室に飛び込んで「監視の船が引き返した」の声を聞くまでは不安で落ち着けなかった。

十四日、舞鶴に無事上陸。

平成九年十二月、「愛媛シベリアを語る会」を中心に慰霊碑を建立。式典に参列して、満州からシベリアの八年、幾たびか生死のはざまを運強く生き抜いた遠い記憶を思い起こして感無量であった。

この想いととも、復員後、多くの良き隣人、先輩や友人、後輩に恵まれた人生に感謝し、好意に応えて社会にいささか奉仕し得た節目を整理、記録して、今後とも健康である限り一層の精進の励みにいたしたい。